

国語だよりR3 その5

相良中学校 国語部

読書感想文オススメ本②～大石先生編～

『島はぼくらと』辻村深月／著



瀬戸内海に浮かぶ小さな島、牙島。そこで暮らす高3の男女4人組は、本土の高校へフェリーに乗って登校している。島を訪れる様々な人たちとの関わりを通して、彼らはそれぞれに道を選び、成長し、そして別れていく。

「かがみの孤城」や「冷たい校舎の時は止まる」などが有名な辻村深月さん。読んだことのある人は意外と多いはず。でも、先生がイチオシなのは、この本。地域興しやシングルマザーなど、4人を取り巻くエピソードがちりばめられていて、全部に手を出そうとすると感想文にならないだろうな。先生にぐっときたのは、謎の天才脚本家がこの島に残したとうわさされる「最後の」作品探し。あっと驚く謎解きだけじゃない、温かい気持ちになれる。卒業を迎えた4人の別れも素晴らしい。泣ける本。山之内すすさんあたりで映像化希望。

『蒸気と錬金』花田一三六／著



蒸気錬金術の実用化に成功、急速な発展を遂げつつある大英帝国。ロンドンで暮らす売れない小説家の「私」は食い詰めた拳げ匂に、編集者から「理法」と「恩寵」の島アヴァロンへの取材旅行を提案される。傑作の執筆を志して一念発起した私は、見知らぬ若紳士から格安の蒸気錬金式幻燈機と妖精型幻燈種「ポーシャ」を売りつけられ、揚々と旅立ったが!?

……なんのことだか全然わからん、という人も、まあ読んでごらんよ、面白いから。難しい設定はすっ飛ばして、便利すぎるスマホ（A I付き）に振り回されるドジな作家の話、ぐらいの理解で大丈夫。ざっくり言うと主人公が巻き込まれるのは「人工的な発展」を遂げた人々と「自然の神秘」を身につけた人々の争い。でも主人公はそんなことにはほとんど気付かないまま。もう少しなんとかならないのか、とやきもきするが、それがこの物語とこの主人公の魅力。主人公の「(物語を)書きたい」という思いに寄り添ってみよう。絶対これ続編が出るな、という終わり方をしています。

以上、対照的な2作品を紹介しましたが、実は共通点があります。それは、登場人物のもつ「譲れない思い」。物語を生き生きと感じさせるのは、やっぱり(いろんな意味で)魅力的な主人公なのですよ。